

七 尾 美 彦

不自由な御身体で学校の仕事をしつつ、この本を書かれた荒井氏には、まったく頭が下る。『新書青森県史』は全四部作なので、著者はあと三冊書かなければならない。まことに御苦労なことである。

青森県の歴史について今まで書かれたものは、本書巻末の参考文献にもあるように、かなりの冊数にのぼっている。そうした先学の業績を踏まえつつ、県史を新しい眼で見直していくことは、絶えず必要なことで、再検討はこれで終りだということはない。

本書の後にも県史は書かれるだろうし、本書も参考文献に掲げられる時がいづれ来るであらう。

本書は、村越先生の『原始時代』の後をうけて書かれたもので、稲作の開始から為信の津軽統一までを扱っている。本県の古代・中世史である。本書の概要を知る為に、目次の大見出しを示しておこう。

窮北の稲作 蝦夷のくに 反抗する蝦夷 蝦夷の社会 みちのくの豪族 中世豪族前史 鎌倉の御家人 糠部の南部氏 水軍安東氏 新政と動乱 中世の秋 下剋上の時代 支配図の書きかえ

本書は、「あとがき」にも書いてあるように、著者がかつて陸奥新報に連載した「津軽の中世」とその後に参加した幾つかの仕事をもとに

している。したがって、旧稿との視点や表現上の共通性はある程度やむを得ないだろう。歴史学の進歩は日進月歩であるから、著者は、最近の諸家の研究を十分にとり入れ、旧稿を改めている。例えば、蝦夷のところでは虎尾先生の研究、安東氏のところでは遠藤巖先生の研究を紹介している。また、表や図を新たに作成されている。例えば一九頁の津軽の蝦夷に関する一覧表、一八〇頁の南部氏と津軽氏の記録の相違に関する一覧表などである。

本書は、全体として読み易く書かれており、高校生などでも十分楽しく読めるものである。特に伝承などの解釈は「なるほど」と思うような解釈である。私は、一覧表などは授業に使用したいと思っている。

ところで、著者は、どこに力点を置いて書かれたのだろうか。一読した感じでは、安東氏に関する部分ではないかという気がした。このことについて、著者は最後の所で「……津軽の地域に限っていえば、中世を織り成す経糸は蝦夷の伝統をうけついで安東氏であったといえよう。曾我氏をはじめとする鎌倉御家人、南部氏の進出、北畠氏をはじめとする兩朝の一統などは、それを彩る緯糸といえようか。」（一八七頁）と云っておられる。蝦夷―安東氏、これがこの本を貫いている基本の線である。

津軽蝦夷のことについては、本書では、東北全体の蝦夷社会の中でその動きを追っている。史料の少ない津軽蝦夷の社会を究明するのは至難のわざである。どうしても、東北史の視点からでないか本県の古代史には迫れないのである。残念ながら、周辺を解明しつつ中心部を推定していくという方法しかないように思われる。その点、安東氏に

関しては史料もかなりあるし、研究も蓄積されているので、それらをフルに使えば、全体像はかなり明らかにすることができる。安東氏の盛衰はそれ自体一つの物語であり、本書でも約六分の一の頁を割いて生き生きと描いている。

私が著者を御訪ねした時、「読んでみて何か問題がありましたか？」と問われた。その時私は答えることができなかった。大きな点では特に問題とすべき点がなかったからである。今、無理に問題点をあげれば、古代・中世の本県の庶民の生活のイメージが浮んでこないということであろうか。

しかし、これは、「ないものねだり」のをしりを免れないだろう。

豪族の動きの背後にある庶民の姿を描き出す仕事は、恐らく我々の永遠の課題であろう。

そこで、ここではそれ以外のことで、二、三意見をのべさせてもらうことにする。

第一は、本書と村越先生の『原始時代』の関係である。本県の歴史も旧石器時代から始まるのであるから、『原始時代』を『新書青森県史1』とし、本書を『新書青森県史2』とすれば、更に続き具合がよくなったのではないかと思う。もしそうなっておれば、弥生―古墳の重複部分はなくなり、本書は「蝦夷のくに」から始まるのである。

『原始時代』を何故『県史』と別にしたのか。私にはどうしても理解できないのである。もともと、この問題はここで云ってもしかたのないことではあるが。

第二は、些細なことで恐縮であるが、阿倍比羅夫が上陸して蝦夷と

接触したと云われる「有間の浜」のことである。これは、『日本書紀』の斉明天皇四年四月の所にてくる記事で、阿倍比羅夫はこの浜に渡島の蝦夷達を集めて大饗したと云う。本書では「有間の浜」を「深浦よりもつと十三に寄ったところが妥当のように思われる」とし、「有間」をウマと読み「馬郡」と関連づけている（二五頁）。このことは、成田末五郎氏も『郷土史大系』の中でのべていることだが、傾聴すべき説である。しかし、この浜に集った「渡島の蝦夷」が、本書で引用している『日本紀略』や『扶桑略記』にある「出羽国渡島の狝」、「出羽国渡島の蝦夷」と系譜的につながるものであれば、「有間の浜」に集まったのは男鹿地方の蝦夷だと云うことになる。本書もそれは肯定しているようである。そうなると「有間の浜」は本県の西海岸とは限らなくなる。むしろ男鹿地方の海岸と考えた方が自然ではないだろうか。ちなみに、斉明天皇四年四月の記事は、主に鱒田・淳代の蝦夷について記載しているのである。

第三は、安東氏の藤崎退去の時期の問題である。上国家の安東氏が藤崎城を南部氏に攻略されて津軽平野から退去する時期については、応永二十五年説、正長元年説、明応年間説、文亀二年説等があるようだが、本書は、一五五頁では応永二十五年説を肯定し、一六四頁や一六九頁では文亀二年説を肯定している。応永二十五年（一四一八年）と文亀二年（一五〇二年）の間には約九十年の年代差がある。両者を肯定するには年代差が大き過ぎるのではあるまいか。

もし、文亀二年説を肯定した場合、次のような問題が生ずる。十三湊の下国家の安東氏が、福島城・唐川城・柴崎城を次々に南部氏に攻

略されて松前に退去する時期は、本書では嘉吉三年（一四四三年）と見ている。そうすると、南部氏は、藤崎攻略の六〇年前に十三湊を攻略していることになる。ありえないことではないが、不自然の感を免れないだろう。

南部氏は、本書の一五五頁〜一五六頁にあるように、大光寺城↓福島城↓唐川城↓柴崎城と攻略を進めていったと思われる。

したがって上国家の藤崎退去↓津軽平野退去は、応永二十五年とした方が自然だと思う。

しかし、文亀二年説も大浦氏の種里入部や大浦築城との関係でなかなか棄て難いものがある。そこで応永二十五年説と文亀二年説を矛盾なく解釈する為に、次のような仮説を立ててみたい。応永二十五年に藤崎を退去して秋田方面に移っていた上国家の安東氏は、文亀二年の少し前に捲土重来して藤崎を回復した。しかし藤崎占拠は一時的なものに終り、文亀二年ふたたび南部氏に追い落された。

このような仮説を立てた根拠は、大浦氏の動向と執拗に続けられた安東氏の津軽回復の努力である。本書でものべている様に、享徳二年（一四五三年）、文明二年（一四七〇年）に安東氏は津軽回復をはかっている。このような努力が文亀二年頃まで続いていたとしても不思議はないと思う。大浦氏の種里入部・大浦築城の目的はこのような安東氏の動きと関連づけて考えると案外無理なく理解できると思う。

大浦光信が種里に入部したのは延徳三年（一四九一年）で、文亀二年の十一年前である。種里入部の目的については、故地復帰というより、安東氏に対する南部側の対策と見たい。成田末五郎氏も『津軽為

信』の中で、「安東氏の押えとして三戸南部が派遣したもの」（二六頁）と見ておられる。

それでは、安東氏と大浦築城とはどんな関係があるのだろうか。私は次のように考えたい。大浦氏の種里入部、築城によって、安東氏の西海岸方面からの津軽平野進入は、かなり犠牲の大きいものになってきたので、安東氏は、秋田から山越えをして津軽平野へ進入することを試みたのではあるまいか。安東氏の津軽回復の執念を考慮に入れると、悲願達成の為にさまざまな試みがなされたと推定することは無理ではなからう。大浦築城は、安東氏が一時的に回復した藤崎から再度追い落された文亀二年の時点でなされているので、山越えルートによる津軽平野進入を阻む為に行なわれたものではないかと思う。大浦氏は、安東氏を津軽から退散させる際に、部将として戦功があつたと思われるので、南部氏はその恩賞として大浦の地を与え、この方面からの安東氏の再来への備えとしたのであろう。

このように仮説を立てると、安東氏の動きと大浦氏の動きが、関連し合うものとして把握されるし、文亀二年説もそれなりに意味をもってくるのではあるまいか。

私の意見は以上であるが、何分郷土史を深く知っていないので、当を得ていないかも知れない。その点は御叱正を賜われれば幸いである。

（B6判、本文一九八頁、定価一、一〇〇円 北方新社刊）